

## 第 19 回

### 「地域共生のための住民主体型世代間交流の実現に向けたアクションリサーチ」

原田 瞬（健康科学部作業療法学科 助教）

### 「疫病と江戸時代中期の人形浄瑠璃」

林 久美子（文学部日本語日本文学科 教授）

開催日時：2021 年 10 月 20 日(水) 15:15-17:15

開催場所：京都橘大学 啓成館 G103

---

## 実施報告

---

### 地域共生のための住民主体型世代間交流の実現に向けたアクションリサーチ

原田 瞬

『地域共生社会の実現』が掲げられている中、高齢者に対する支援のみならず、子育て世帯や若者を含めた多世代交流・共生の取り組みにより、地域社会で市民が支えあう互助の仕組みをいかに育てていくかが問われています。大学近隣にある山科団地は高齢化率の上昇が顕著な地域であり、京都市によって少子高齢化対策を行う重点地域に指定されています。我々は 2019 年より山科区役所と連携し、この地域を対象としたアクションリサーチを実施してきました。昨年は地域住民を対象とした意識調査から、地域活性化を目指した世代間交流プログラムを実践しました。本サロンでは、住民に対する意識調査の結果、COVID-19 流行下における世代間交流の実践とその結果、今後の研究計画について報告しました。Zoom を用いた遠隔交流をより良いものにするためのテクニカル面での助言、研究の方向性やアウトカムに対するご意見等をいただきました。何をもって地域が良くなったと捉えるのか、本研究の最終的な産物として何を指すものなのか等、自分でもモヤモヤしていたところを再考するための多くの示唆を得ることができ、貴重な機会となりました。お忙しい中、聴講、ご意見をいただいた教職員の皆様に御礼申し上げます。

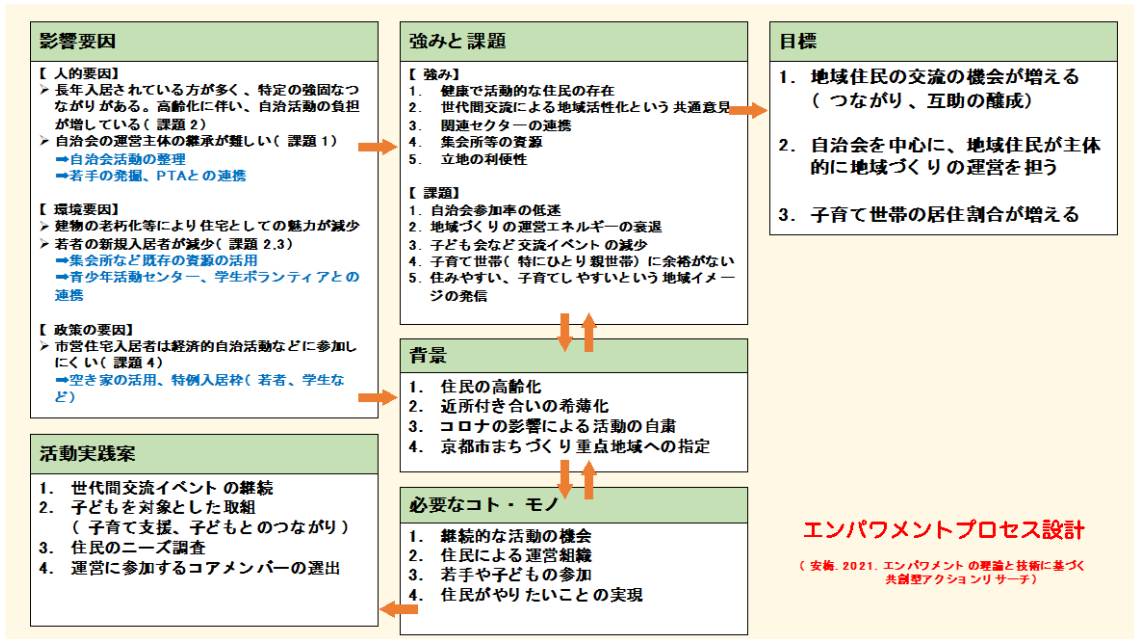


図 地域活性化のための地域評価に基づくエンパワメントプロセス設計

## 疫病と江戸時代中期の人形浄瑠璃

林 久美子

さまざまな社会生活に影響を与えた Covid-19 は、ライブエンターテインメントにも大打撃を与えました。当初引き合いに出されたのはスペイン風邪か、幕末のコレラ禍の話ばかりだったのですが、都市の演劇はそれ以前からずっと、繰り返し押し寄せる感染症の波と戦っていたはずで、これまでの演劇史の視点にはそれがなかったことが気になり始めました。

そんな中、京都を代表する浄瑠璃太夫の一作品が天和期の痘瘡流行期のものであることに気付いたことから、探してみると、ほかにも疫病退散の願いを込めたものがあることがわかりました。この時期に京都を去り、道頓堀で旗揚げした竹本義太夫の動向のもこうした状況と無関係ではないと推測します。

そこで演劇史を災害史と重ねて考察する手始めに、疫病の表象である鬼神退治ものの演目を切り口に、江戸中期の人形浄瑠璃座がどのように苦境を切り抜けようとしたのか、または観客が芝居に何を求めたのか、いくつかの作品を示しながら具体的にお話ししました。

他分野の先生方が感心を寄せてお聞き下さり、的を射た質問をしてくださったので、これからのアプローチについて考えを深める機会ともなりました。

また、浄瑠璃と言えば心中ものといったイメージを抱いておられた参加者に、別の側面を知っていただくきっかけになったのもうれしいことでした。

---

## 参加者報告

---

新型コロナウイルスの感染症拡大防止のため、「たちばな研究サロン」はながらく対面での開催ができなかった。このたび、10月20日に啓成館教室に教員が集い、開催ができたことは実りの秋にふさわしい慶事であった。

今回の研究サロンでは2つの報告がなされた。1本目は、健康科学部作業療法学科の原田瞬助教による「地域共生のための住民主体型世代間交流の実現に向けたアクションリサーチ」である。2本目は、文学部日本語日本文学科の林久美子教授による「疫病と江戸時代中期の人形浄瑠璃」であった。林報告は疫病蔓延と緊密に関係する内容、原田報告は感染拡大の最中での取組みの良事例であり、異なる学部・学科の教員が、研究者として近年のパンデミックにどのように向き合ったのかということを知る場としても有意義であった。

さて、原田報告は、世代間交流を望む山科団地の切実な声に即応したアクションリサーチについて紹介する内容であった。これは少子高齢化を背景とした互助・共助の衰退という課題に対するケーススタディである。報告の中で指摘のあった、オンライン交流会のなかで生まれた「不思議な一体感」という点が興味深かった。それは新たな共同幻想を生むのだろうか。質疑応答は、オンライン交流会の音声タイムラグに関するテクニカルな議論、「単身世帯をいかにまきこむのか」、「研究目的や取組みの効果をどのように評価するのか」といった本質的な質問など、多岐にわたった。いずれも研究を推進する上での援護射撃といった内容で、研究サロンにふさわしく感じた。

2つめの林報告は、近年の演劇界の現状に触れられたのち、江戸時代中期における疫病の蔓延と人形浄瑠璃の関係性を深く掘り下げていく内容であった。史料的な制約を丁寧に説明しつつ、それでもなお、その時代の人々の対応が浮き彫りになっていく過程が興味深かった。疫病の表象としての酒吞童子等の鬼神退治という視座に加え、とりわけ観劇によって人々が疫病退散を願ったという指摘に、演劇の多様な側面を感じた。質疑応答では、情報工学科の教員より史料へのアクセスについて議論がなされたことが印象に残った。人文学と情報科学の学融は近年急速に進んでいるが、本学でも今後そういった展開があるように感じられたためである。

いずれも、非常に興味深い報告であり、学問の秋にふさわしい研究サロンとなった。研究という大樹はいま多様に分岐し、その成果は、数えんとしてもかなわなくなっている。こうしたなかにあっても、いま、つぼみとなりつつある本学での研究の先端に接することができた一日であった。